慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アデレード・ C・ ヒル, マーチン・ キルソン共編『アフリカについて: 一八〇〇年代から一九五〇年代にいたるアメリカ黒人指導者のアフリカ感』
Sub Title	Adelaide C. Hill & Martin Kilson, eds., Apropos of Africa : sentiments of American negro leaders on Africa from the 1800s to the 1950s
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.8 (1970. 8) ,p.94- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19700815-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

嫡出子にあつたことに触れた。彼がモスクワで社会史国際研究所を訪れた折に、その文献の有無を確認したところ、その証拠は疑う余地がないと知らされたとのことである。所長は興味深々、同僚のひとりは大声を張りあげた。「《それこそ "*nihil humani a me alienum puto.*" というマルクスの言い草とぴったりだよ》――私がこの研究所で聞いた唯ひとつのマルクス的冗談」。マルクスの用いた言語シンボルにまでフォイヤーが精神分析的解釈をくだしていることには、いささかうがち過ぎた節もあろう。しかしながら、幻想は幻滅に変る。薄倖におわるというには余りにも無慙な死に至る病、結局は、死によつてしかその病を癒せぬ絶望の淵に歩み寄つていたマルクスの四女エリナーは、われわれの時代においては、スターリンの娘スヴェトラーナを想起させずにはおかない。

（奈良和重）

Adelaide C. Hill & Martin Kilson, eds., Apropos of Africa: Sentiments of American Negro Leaders on Africa from the 1800s to the 1950s

London: Frank Cass & Co., Ltd., 1969, xiv＋390pp.

アデレード・C・ヒル　マーチン・キルソン　共編

『アフリカについて――一八〇〇年代から一九五〇年代にいたるアメリカ黒人指導者のアフリカ感――』

一

本書は、その表題からも分かるように、一八〇〇年代から一九五〇年代にいたる時期のアメリカ合衆国における黒人運動指導者の対アフリカ感情、対アフリカ認識を、かれらの演説、手記、論説などによつて直接語らせることを狙いとして編まれた、一種の資料集である。

もともと合衆国の黒人がアフリカから運ばれた奴隷の子孫である

以上、これらアメリカ黒人とアフリカとのあいだには、断ち切ることのできない絆が存在するはずである。こうした絆は、アメリカ黒人の意識や運動に対して、時代によつてその程度に差こそあれ、少からず影響をあたえてきた。そしてまた、こうした形で「アフリカとの絆の意識」の影響を受けた合衆国黒人運動が、逆にアフリカ・ナショナリズムに刺激をあたえた場合もある。こうした、合衆国黒人運動とアフリカ・ナショナリズムの相互作用の問題は、極めて興味深くかつ重要なテーマであるにもかかわらず、これまで、さほど論究されたようにも思われない。ことに合衆国黒人のアフリカ意識の問題は、パン・アフリカニズム研究のなかで附随的にとりあげられたことはあるにしても、独立のテーマとしてこれを論じたものは John A. Davis, ed., *Africa Seen by American Negroes*. New York: American Society of African Culture, 1958; Harold R. Isaacs, "The American Negro and Africa: Some Notes," *Phylon*, 1959; George Shepperson, "Notes on Negro American Influences on the Emergence of African Nationalism," *Journal of African History*, I, 1960 程度であろう（このほかにJ.W.E. Bowen, ed., *Africa and the American Negro*, Atlanta: 1896 の名も挙げうるが、筆者はまだこれに接していない）。

そうした現状からして、ここに、ヒル、キルソン共編『アフリカについて』が刊行されたことは、まことに意義深いことであるといわざるをえない。編者の一人であるアデレード・C・ヒル女史はボストン大学アフリカ研究センターの所長代理をつとめている社会学専攻の助教授であるが、彼女自身が黒人である関係もあつてか、その関心は本書のようなテーマに集中しており、筆者も同研究センターにヴィジティング・スカラーとして滞在中、いく度かこの種の問題について意見を交換したことがある。もう一人の編者マーチン・キルソンはハーバード大学政治学講師をつとめており、ガーナ大学アフリカ研究所訪問教授の経験もある。主要著書としては *Political Change in a West African State: A Study of the Modernization Process in Sierra Leone*. Cambridge: Harvard U.P., 1966; *The Political Awakening of Africa*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1965 (co-editor) などがある。

それでは以下、内容を簡単に紹介しておこう。

二

本書は前述のように、合衆国黒人運動指導者の、アフリカに関わる演説、手記、論説などを収録した資料集であるが、それらの資料は、アフリカに対する関心・認識の様態にしたがつて、四つに分類されている。そして分類されたこの四つの類型がそのまま本書のなかで四つの章として整理されているのである。そこで、まずこの四つの章に登場する黒人指導者の名前を紹介することからはじめよう（なお第二章では黒人組織も登場する）。

I. Let's Go Home to Africa Paul Cuffe; Martin Delany; Frederick Douglass; Henry M. Turner; John H. Smyth; Marcus Garvey; Elijah Muhammed

II.(a) How Negro Americans Can Help As Individuals Lott Cary; Alexander Crummell; John H. Smyth; George W. Williams; Booker T. Washington; John W. Gilbert; Frederick J. Loudin; John E. Bruce Harry Dean; Paul Robeson; Carter G. Woodson

II.(b) How Negro Americans Can Help As Organizations The African Society; African Civilization Society; Lynchburg "African Development Society"; American Negro Academy; Children of The Sun; Sons of Africa; Negro Society For Historical Research; African Union Company; Association for the Study of Negro Life and History; Universal National Negro Improvement Association; Council on African Affairs; American Sociey of African Culture

III. When I was in Africa Henry M. Turner; Levi J. Coppin; Eslanda Robeson; Richard Wright; Era B. Thompson; Horace M. Bond

IV. Negro Self-Identity and Pan-Africanism T. Thomas Fortune; W.E.B. DuBois; Emmett J. Scott; James W. Johnson; Ralphe Bunche; George S. Schuyler; Alain Locke; Canada Lee; E. Franklin Frazier; James W. Ford; A. Philip Randolph; Charles C. Diggs, Jr.

さて、これらの黒人指導者たち（および黒人組織）は、いずれも「アフリカ意識」をいだいていたのであるが、こうした意識はいつたいいつごろ芽生えたものであろうか？　本書の序文によれば、それは一八〇〇年代中期のことである。すなわち、合衆国黒人知識人が発生した一八〇〇年代中期に、アフリカ的遺産と自己との一体性を理解し確認しようとする運動が起り、さらに南北戦争以後における黒人層の社会的流動性の増大によつてその傾向は一層拍車をかけられるにいたつた。

合衆国黒人による「アフリカとの一体感」の増大は、のちにヨーロッパ列強によつてアフリカが完全に分割され、植民地化されるにいたつて、「アフリカ人との連帯感」にまで高められる。白人の支配する産業社会のなかで人種差別に苦しむ点では、合衆国の黒人もアフリカの黒人も同様だという認識が、こうした連帯感を生みだすのである。

こうした「アフリカとの一体感」や「アフリカ人との連帯感」は、しかしながら、かならずしも合衆国黒人運動家をすべておなじ方向へ導いたわけではない。ある運動指導者は「故国アフリカへ」帰ることによつて合衆国黒人の問題とアフリカ黒人の問題を同時的に解決しようと目指し、またある黒人指導者は個人あるいは組織の力によつて、主としてアフリカ人を救済することを考え、また第三のタイプの黒人指導者は旅行、ビジネス、宗教活動などでアフリカに滞在したときの印象を語ることによつて、アフリカとの絆についての啓蒙活動をおこない、また第四の黒人指導者は黒人種の自己確認を求めつつ、さらにそれからパン・ネグロ主義、パン・アフリカニズムと飛躍をとげた。しかし、ここに分類した四つのタイプは一種の理念型であつて、実際には、個々の黒人指導者（および組織）

は四つのタイプに代表されるような側面を、いくつか合せもつていた場合が多い、と筆者は思う。

ところで、本書の編者は、こうした四つのタイプについて、まず総合的な解説をおこない、さらに個々の指導者、組織についても、一～二ページの解説とそれにつづく文献解題をあたえている。いずれもまことに要をえており、綜合的な解説はそのままで単独の学術論文たりうるであろうし、個々の指導者についての解説も、いかなる「人名辞典」にも劣らない内容であるといえるであろう。ここでは、しかし、それらについて詳細に紹介することはあまり意味がないと思う。というのは、あくまでも「資料をして直接語らせる」ところに、本書の存在理由があるからである。そこで以下、本書を通観してえた印象を若干述べて、本稿を結ぶことにしたい。

三

本書のもつ最高の価値は、散逸していたであろうこの種の資料を蒐集し、それもナマのままで一冊の本に収録・刊行したところにある。前述のようにこの種の研究はまだ、十分になされているとはとうていいえないような段階にある。そうした段階にあるときに、この種の資料集を刊行するということは、他の研究者に対して多大の恩恵を施すことに等しく、それだけにまた大いなる犠牲的精神を必要とするであろう。そうした点の評価も含めて、本書は、最大級の讃辞を受けるにたる労作である。

さらに本書の構成もまた非凡である。合衆国黒人の対アフリカ感情やアフリカ意識のタイプを、前述のごとき四つに分類し、原資料をしてその分類の妥当性を語らしめるといつた手法は見事であるというほかはない。

思うに、本書が対象とした領域は、パン・アフリカニズム史研究と合衆国黒人運動史研究の境界領域にあたるものであつて、それだけにどちらの分野からも十分に論究されにくいという特殊性をもつている。それを正面からとりあげるためには、双方の分野についての十分な知識を必要とする。編者はそうした知識の裏づけをもつて、しかもこの境界領域に接近するひとつの枠組を、本書のなかで示したのである。ここに本書のもつ第二の価値があると思う。

第三の価値は、個々の黒人指導者や黒人組織に対する編者の評価に、比較的かたよりが少いというところにある。これは資料集である以上重要なことであろう。しかも、それでいながら、こうした一種の客観主義にありがちなものたりなさを感じさせないのは、前述のごとき分類、構成の非凡さのゆえである。

いずれにせよ、本書は、今後パン・アフリカニズム史と合衆国黒人運動史を研究するすべての史家が、かならず依存しなければならない、重要な文献集のひとつであることにまちがいないと思う。

（一九七〇・六・一九）

（小田　英郎）